

**新時代に対応した高等学校改革推進事業  
(創造的教育方法実践プログラム)**

**令和5年度 事業完了報告書**

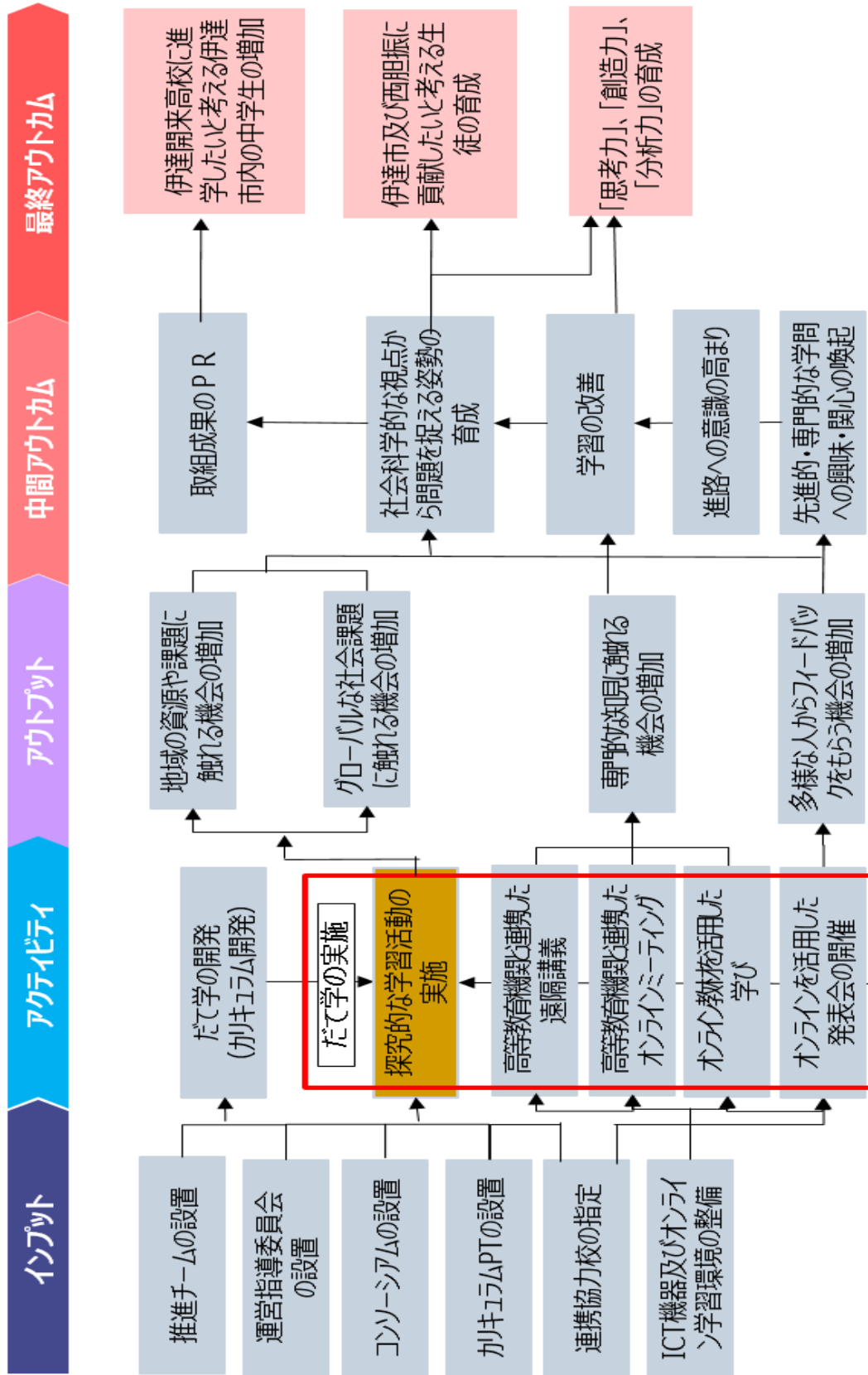
**北海道伊達開来高等学校**

## 目 次

1	構想概略図	2
2	ロジックモデル	3
3	成果概略図	4
4	目的	5
5	令和5年度の事業の実績	7
6	研究2年目の成果と課題	24
7	事業の実施体制や管理方法	26
8	運営指導委員会の体制及び取組	26
9	コンソーシアムの体制及び取組	28
10	コーディネーターの配置及び活動内容	28
11	令和5年度成果普及のための取組	29
12	次年度に向けて	29



## 2 ロジックモデル



## 【北海道伊達開来高等学校】遠隔等を活用した大学等の協力による持続可能な社会を担う人材育成

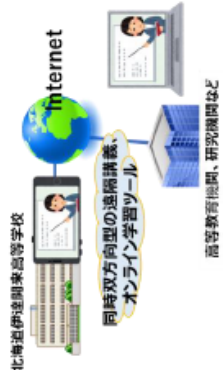
### 新しい教育方法を活用した 教科等横断的な学びのキャリアラムの概要

#### 学校設定科目「だて学」

- 1 目的  
地域を題材に探究的な学びを深めること
- 2 概要
  - ・各教科の特色を生かし地元について知るとともに、将来、自らがどう貢献できるのが探究する。
  - ・高等教育機関や事業所などと連携することで、発展的な課題の解決に取り組む。

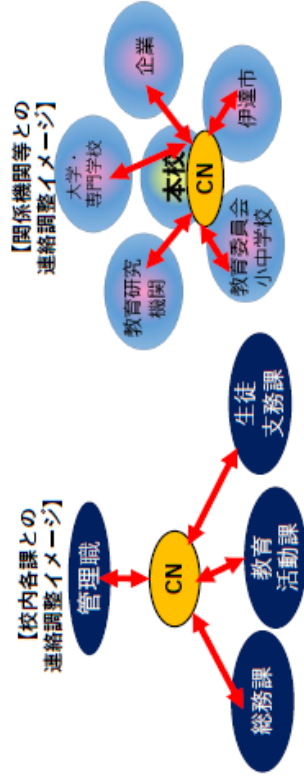
#### 【「だて学」に関連する各種分野】

国語科分野	芸術（美術）分野
地歴・公民分野	外国語科分野
数学科分野	家庭科分野
理科分野	情報科分野
保健体育科分野	商業科分野



### 関係機関との連携・協働体制の構築方法

- 主にコーディネーター（以下「CN」という。）が次の役割を担い、関係機関等と連携・協力体制を構築。
- ①「だて学」のコンセプトを関係機関に説明
  - ②連携・協力する関係機関等との連絡調整
  - ③校内における連絡調整
  - ④運営指導委員会やコンソーシアム会議の運営等



### 令和5年度の目標

- ①オンラインを活用して高等教育機関から講義を受けるなど、より専門的な教育を受けられる機会を設ける。
- ②生徒が設定した課題に応じて、継続的に専門家と研究協議を行い、指導・助言が受けられるよう、様々な高等教育機関等との連携体制を構築する。
- ③STEAM教育を柱とした教科等横断的な学習を推進するキャリアラムを開発する。

### 取組状況

- ①総合的な探究の時間および「だて学」において、高等教育機関の遠隔講義を実施
- ②生徒が設定した課題に応じて、専門家と研究協議を行い、指導・助言が受けられるネットワーク体制の強化
- ③主体的に探究活動に取り組む生徒の増加による「探究チャレンジ」の発表における上位大会への進出

### 成果と課題

- 地域に貢献したいと思う生徒を増加させることができた。
- 高等教育機関との連携体制を構築することができた。
- 地域企業と連携した授業を実施することができた。
- 探究活動を更に充実させる必要がある。
- 開発したキャリアラムを通じて身に付けた資質・能力の評価方法を確立する必要がある。

#### 4 目的

本校では、次の3点を目的として本事業に取り組んでいる。

- オンラインを活用して高等教育機関から講義を受けるなど、より専門的な教育を受けられる機会を設ける。
- 生徒が設定した課題に応じて、継続的に専門家と研究協議を行い指導助言が受けられるよう、様々な高等教育機関等との連携体制を構築する。
- STEAM教育を柱とした教科等横断的な学習を推進するカリキュラムを開発する。

本校が構築するプログラムは、「だて学」を中心としているが、各年次の総合的な探究の時間や各教科等においても、生徒の興味・関心や疑問等に応じて専門家から講義や助言を受けられる体制を構築することとしている。今年度は、「だて学」開講初年度であったことから、昨年度より外部と連携した講義等の実施が増加している。

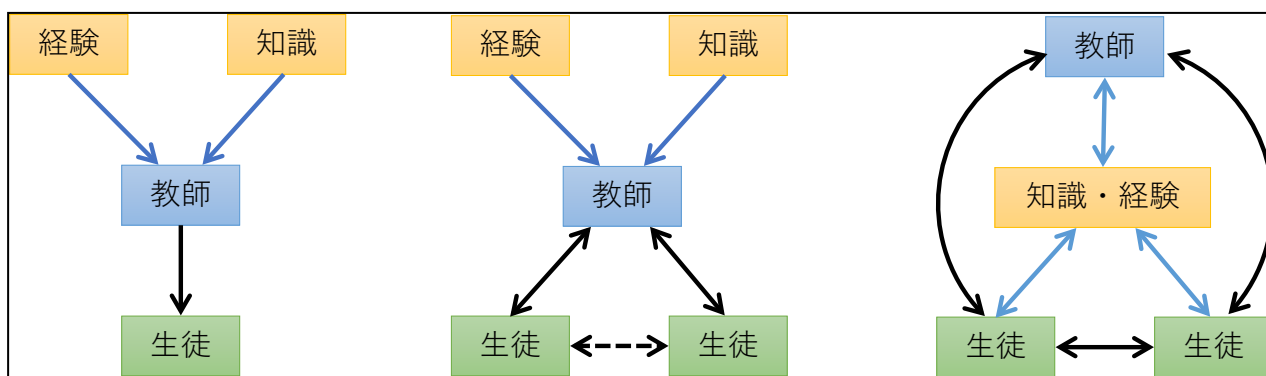
##### (1) 探究活動の充実

令和4年度までは、探究的な学習活動を通じて「協働的な学び」の充実を図ることとし、全ての科目において探究的な学習活動を実践した。その多くは、「課題を調べる、調べた課題に応じてテーマを設定する、テーマに基づき課題解決策を検討する、課題解決策をまとめ発表する」といった流れであったが、生徒による活動の差異が少ないため、学習活動にも大きな差がない状況であった。本校では、この学習活動を「インサイド・アウト（課題解決型探究活動）」と定義することとした。

本事業が開始された令和4年度からは、「アウトサイド・イン（未来ソウゾウ“想像・創造”型探究活動）」（「ゴールをイメージし、そのゴールに向けて何ができるかを探究する活動」と定義）を実践することとした。「アウトサイド・イン」の実践では、ゴールイメージが同じだったとしても、その解決に至るまでの生徒の取組は様々で、それらを把握することが困難な面はあるものの、生徒の興味・関心に沿った探究活動が実践され、探究に積極的に取り組む生徒が増加している。

##### (2) 連携の在り方

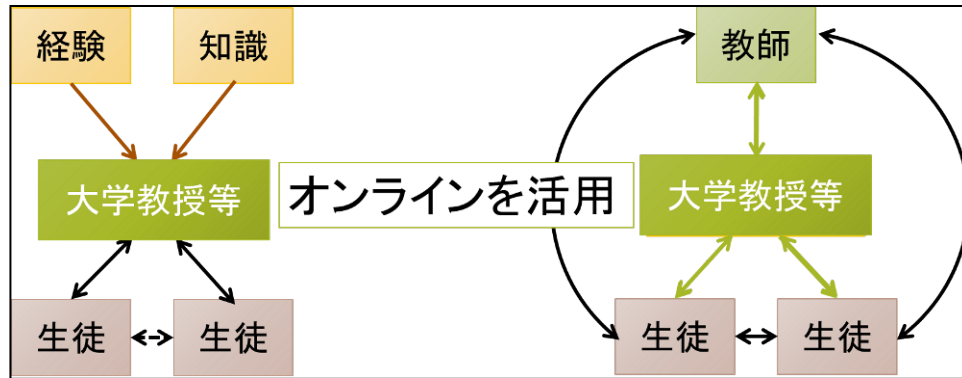
次の図は、1990年にアメリカの教育学者ロバート・K・ブランソンが発表した「未来の学校教育モデル」を参考に作成したものである。生徒の学びについては、教師が正解を一方向的に教え込む「口頭継承」（図左）から生徒と教師、生徒同士が双方向のやりとりを行う（図中央）形式に移行している。今後は、情報技術の発達により、生徒は自分の判断でインターネット等を利用して知識等を得ることができる（図右）。



(Branson,R.K.(1990) 「Issues in the Design of Schooling:Changing the Paradigm.Educational Technology,Vol30,No.4,7-10」より作成)



本校では、オンラインを活用して高等教育機関等の専門家から講義を受けたり、生徒の興味関心や探究課題に応じて助言をいただいたりしながら探究活動に取り組んだ。下図がその連携のイメージ図であり、本事業においては、遠隔講義を図左、オンライン・ミーティングを図右でイメージしている。令和4年度の実践では、遠隔講義については複数が実施できたが、オンライン・ミーティングは1度のみの実施となった。生徒の多様な興味関心や探究課題に対応できるよう、より多くの高等教育機関や企業等との連携体制を構築し、生徒のニーズに合った講義やミーティングを実施できるようにしていく。



## 5 令和5年度の事業の実績

### (1) 事業の実施日程

事業項目	実施日程(令和5年4月1日～令和6年3月31日)											
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
<b>カリキュラムや教育方法等の検討・開発・実施</b>												
だて学担当者会議	●	●	●	●	●	●	●	●				●
外部講師が来校した講座	●	●	●	●		●						
連携機関との打合せ	●	●	●	●	●	●	●		●	●		
外部連携先での学習活動			●	●								
オンライン双方向の学習活動				●	●	●		●		●		
オンライン会議の講演			●									
メール等による外部連携	●	●	●	●		●	●		●	●		
<b>関係機関との連携協力体制の構築・維持</b>												
運営指導委員会								●				●
コンソーシアム会議						●		●				●
先進校視察								●				
<b>コーディネーター</b>												
コーディネーター(伊藤氏)					●	●	●	●		●	●	●
<b>成果発表・成果普及</b>												
「だて学」全体発表会								●				
「だて学」市長・議員向け発表								●				
私たちの探究を作ろうプロジェクト共創イベント in Summer				●								
社会との共創推進プロジェクト				●		●		●		●		
探究チャレンジ・ジャパン											●	
<b>成果検証</b>												
アンケート調査								●				

### (2) 新しい教育手法を活用したカリキュラム開発

- ・「地域貢献」をテーマに探究的な学習活動を展開することから、地域との協働や地域の活性化等について、遠隔講義を活用するなどして、高等教育機関からより専門的な講義を受けられるようにした。
- ・また、基盤となる知識を遠隔講義等で学ぶことに加え、オンラインミーティングを活用した同時双方向の研究協議を実施して、生徒の主体的な学びや協働的な学びを促すとともに、専門家から適切な助言をいただいた。

### (3) 事業の具体

ア 3年次だて学「数学科」

#### (ア) 連携機関

- ・TEAM「ゼロカーボンいぶり」



(イ) 内容


- ・令和4年度中に、室蘭工業大学教授 山中真也 様、准教授 木元浩一 様、胆振総合振興局胆振地域ゼロカーボン推進室主査 倉野健人 様 と、本校数学科及び特色ある教育推進課長を中心に連携内容を協議した上で、4月から7回にわたって関係の方々に講演をしていただいた。また、令和5年6月6日（火）には、市内巡検を行った。



(ウ) 成果


- ・多様な講師から講演や説明を受け、また、市内巡検を行うことで、ゼロカーボンに関する生徒の理解が深まった。

(エ) 課題



- ・連携先の「TEAM『ゼロカーボンいぶり』」に主導していただいて、多くの講演等が企画されたが、その分、生徒自身による課題設定や独自の調査活動を行う時間が十分に確保できなかったため、講演等と主体的な活動の時間の配分を調整する必要がある。


教科・科目	だて学（数学）	実施日	令和5年4月18日（火）
単元名	ゼロカレ構想		
本時の目標	ゼロカーボンについて知る		
連携機関等	胆振振興局		
連携の目的	ゼロカーボンについて、専門的な見地から講義をしていただくため		
本時・連携の内容			
時間：5時間目			
場所：3A 教室			
講師：胆振総合振興局 倉野 様			
内容：1 今の北海道			
2 ゼロカーボン・カーボンニュートラル・脱炭素の意味			
3 二酸化炭素はどのような活動で排出されるか			
4 緩和と適応について			
			
評価（課題）	情報量が多く、生徒がどこまで理解できたか把握できなかった。まとめや振り返りを行い、自分事にさせることで知識の定着を図る必要がある。		
教科・科目	だて学（数学）	実施日	令和5年4月25日（火）
単元名	脱炭素概論（5時間目） 脱炭素概論その2（6時間目）		
本時の目標	北海道の今を知り、再生可能エネルギーについて学ぶ（5時間目）		


	なぜ？を考えることの大切さを知る（6時間目）
連携機関等	胆振総合振興局（5時間目）、室蘭工業大学（6時間目）
連携の目的	脱炭素概論について、専門的な見地から講義をしていただくため
本時・連携の内容	
時間：5時間目 場所：3A教室 講師：胆振総合振興局 倉野 様 内容：今、北海道で何が起きているのか？ なぜ、ゼロカーボンが必要？	 
時間：6時間目 場所：3A教室 講師：室蘭工業大学 山中 様 内容：1 自己紹介（宿題の答え合わせ） 2 なぜ？を考えることの大切さ 3 伊達市の戦闘力（エネルギーの視点）	
評価（成果）	4月18日（火）の内容を思い出しながら、生徒は既習の内容を想起しながら講義を聞くことができた。


教科・科目	だて学（数学）	実施日	令和5年5月9日（火）
単元名	脱炭素とお金		
本時の目標	カーボンプライシングとは何かを知る（5時間目） 脱炭素社会を実現するために、なぜ金融が必要なのかを知る（6時間目）		
連携機関等	室蘭工業大学（5時間目）、北洋銀行（6時間目）		
連携の目的	脱炭素と金の関係について、専門的な見地から講義をしていただくため		
本時・連携の内容			
時間：5時間目 場所：3A教室 講師：室蘭工業大学 木元 様 内容：1 自己紹介 2 CO <sub>2</sub> を減らすには？ 3 需要と供給 4 カーボンプライシング（炭素税）の有効性 5 グローバルな視点（国境調整措置） 6 室工大と一緒に共創しよう！			
時間：6時間目 場所：3A教室 講師：北洋銀行 鈴木 様 内容：1 銀行の役割 2 北洋銀行について 3 SDGs／脱炭素について 4 北洋銀行の支援内容について			
評価（成果）	5時間目と6時間目の内容が関連しており、生徒の理解度が高い講義となった。課題設定に向けて、生徒は様々な角度から物事を見ることができた。		

教科・科目	だて学（数学）	実施日	令和5年5月16日（火）
-------	---------	-----	--------------

単 元 名	脱炭素と農業		
本時の目標	いまの農業が抱える課題を知る（5時間目） スマート農業について知る（6時間目）		
連携機関等	北海道農政事務所（5時間目）、北海道大学（6時間目）		
連携の目的	脱炭素と農業について、専門的な見地から講義をしていただくため		
本時・連携の内容	<p>時間：5時間目 場所：3A 教室 講師：北海道農政事務所 佐藤 様 内容：みどりの食料システム戦略の実現に向けて</p>  <p>時間：6時間目 場所：3A 教室 講師：北海道大学 石井 様 内容：スマート農業</p> 		
評価（成果）	農業の現状と課題を知り、その解決に役立つ農業ロボットについて理解を深めることができた。		

教科・科目	だて学（数学）	実施日	令和5年5月23日（火）
単 元 名	脱炭素と農業（食育）		
本時の目標	なぜ、企業がゼロカーボンに取り組んでいるのかを知る		
連携機関等	株式会社アレフ		
連携の目的	脱炭素と農業（食育）について、専門的な見地から講義をしていただくため		
本時・連携の内容	<p>時間：5時間目 場所：3A 教室 講師：株式会社アレフ 葛西 様 内容：1 企業で行っている食品ロスや食品廃棄物を減らす取り組みを知る 2 自分の普段の生活で食品ロスや食品廃棄物を減らすアクションを考える</p> 		
評 価（成果）	生徒は、食品ロスとゼロカーボンの関係について身近な企業（びっくりドンキー）から説明を聞くことで、理解を深めることができた。		
教科・科目	だて学（数学）	実施日	令和5年5月30日（火）
単 元 名	脱炭素と農業（気候変動）		
本時の目標	気候変動適応（農業分野）の取組を知る		
連携機関等	カルビー株式会社		

連携の目的	脱炭素と農業に関して、専門的な見地から講義をしていただくため		
本時・連携の内容	<p>時間：6時間目</p> <p>場所：3A教室</p> <p>講師：カルビー株式会社 本吉 様</p> <p>内容：1 農業の持続可能性向上、脱炭素の適応策</p> <p>①じゃがいもの品種開発 ②科学的栽培の推進</p> <p>③農業の省力化・効率化 ④産地の分散化</p> <p>2 地球環境への配慮</p>		
			
評価（成果）	生徒は、地球温暖化に伴う気候変動に対して、企業として行っていることを知ることができた。ポテトチップスを作る工程でのリサイクルなど具体的な話が多く、生徒は身近なことから捉えて聴講することができた。		

教科・科目	だて学（数学）	実施日	令和5年6月6日（火）
単元名	伊達市の再エネとゼロカーボン農業		
本時の目標	伊達市の農業人口減少に対する対応を学ぶ 施設園芸を高度化する効果と課題を学ぶ ゼロカーボン農業を普及させるにはどうすればよいか学ぶ		
連携機関等	伊達市役所		
連携の目的	伊達市の再生可能エネルギーやゼロカーボン農業について、専門的な講義をしていただくため		
本時・連携の内容	<p>時間：4時間目</p> <p>場所：3A教室</p> <p>講師：伊達市役所 山根 様</p> <p>内容：1 株式会社デンソー 2 伊達市の農業</p> <p>3 伊達市とデンソーの取組</p> <p>4 伊達市の再エネ</p>		
			
評価（成果）	伊達市の農業について、座学と農業研修センター訪問を組み合わせることで、生徒の理解がより一層深まった。		
教科・科目	だて学（数学）	実施日	令和5年6月6日（火）
単元名	伊達市の再エネとゼロカーボン農業		
本時の目標	再生エネルギーとゼロカーボン農業の実状について巡検を通して学ぶ		
連携機関等	伊達市役所・ユーラスエナジー		



連携の目的	伊達市内の再生エネルギーとゼロカーボン農業を推進している施設を紹介していただくため
<p>本時・連携の内容</p> <p>時間：5・6時間目</p> <p>場所：関内農業研修センター、稀府農業研修センター、ユーラスエナジー事務所、ユーラスエナジー風力発電所</p> <p>内容：</p> <p>12:30 学校発</p> <p>12:45～13:05 関内農業研修センター見学</p> <p>13:30～13:50 稀府農業研修センター見学</p> <p>14:05～14:20 ユーラスエナジー事務所見学</p> <p>14:35～15:00 ユーラスエナジー風力発電所見学</p> <p>15:25 学校着</p>	
評価（成果）	<p>座学と見学を組み合わせることで、生徒は具体的なイメージをもつことができた。また、施設の運用上の課題について詳しく知ることができた。</p>



### イ 3年次だて学「国語科」

#### (7) 連携機関

- ・北海道教育大学旭川校

#### (イ) 内容

- ・北海道教育大学旭川校准教授 渥美伸彦 様 に依頼し、生徒が構想した「中学生向けの国語の授業」について助言をいただいた。

#### (ウ) 成果

- ・オンラインでやり取りを行うことができたことで、生徒は様々な知識・技能を身に付けることができた。
- ・コーディネーターを介さずに、適切な機関と効果的に連携することができた。

#### (エ) 課題

- ・同様の実践を他教科でも多く実施できるよう、コーディネーターの活用を推進する必要がある。

教科・科目	だて学（国語）	実施日	令和5年6月6日（火）
単元名	「だて」を主題にした自作詩を活用する国語科の授業考案・実践		
本時の目標	構想した中学生向けの授業について発表するとともに、それに関する助言を受けて、国語科教育に対する理解を深めること		

連携機関等	国立大学法人北海道教育大学旭川校		
連携の目的	国語教育について、専門的な見地から助言をいただくため		
本時・連携の内容			
<p>時間：3時間目  場所：208 教室  講師：北海道教育大学旭川校 渥美 様  内容：発表に対する助言及び講義</p>			
			
評価（成果）	生徒が考案した授業案に対する助言をいただき、よりよい授業構想に繋げることができた。また、教授方法の具体的な手法について紹介いただき、教育学に対する理解を深めることができた。		

#### ウ 3年次だて学「理科」

##### (7) 連携機関及び内容

- ・洞爺湖有珠山ジオパーク推進協議会  
ジオパークの全体像について講演をいただいた。また、生徒の作成した発表スライドや原稿等について、ご意見をいただいた。
- ・伊達市総務部危機管理課  
生徒が伊達市役所を訪問し、インタビューを行った。
- ・UWクリーンレイク洞爺湖  
洞爺湖の外来種防除活動について講義をいただいた。また、令和5年7月18日（火）、生徒は外来種防除作業に参加した。
- ・伊奈不動産株式会社  
エゾシカ猟について、生徒が電話でインタビューを行った。
- ・山口県立大学  
阿部真育准教授に依頼し、メールで発表スライドや原稿について意見をいただいた。
- ・いきものいんく  
代表理事 加藤康大 様から、発表スライドや原稿について電子メールでご意見をいただいた。



##### (イ) 成果

- ・各班が外部機関と連携を図り、効果的に探究を進めることができた。

##### (ウ) 課題

- ・オンライン講師依頼の予算を計上するなどして、他地域のジオパークなど遠方の教育資源の活用を推進し、講演をさらに充実させる必要がある。


教科・科目	だて学（理科）	実施日	令和5年4月18日（火）
単元名	課題設定		

本時の目標	ジオパークの全体像について知り、課題設定のきっかけをつかむ		
連携機関等	洞爺湖有珠山ジオパーク推進協議会		
連携の目的	ジオパークの全体像や考え方について、専門的な見地から講演していただくため		
本時・連携の内容			
<p>時間：5時間目</p> <p>場所：物理室</p> <p>講師：洞爺湖有珠山ジオパーク推進協議会事務局次長 加賀谷 様</p> <p>内容：ジオパークとは何か ジオパークの考え方と特徴 配布資料説明 ジオパークをテーマにしたカードゲーム体験</p>			
			
評価(成果)	生徒は講演を聞き、ジオパークについて理解し、課題を適切に設定することができた。		

教科・科目	だて学(理科)	実施日	令和5年6月6日(火)
単元名	情報収集		
本時の目標	防災班の発表コンテンツを作成するための情報を収集する		
連携機関等	伊達市総務部危機管理課		
連携の目的	防災班が発表コンテンツの作成に向けて、専門的な見地から講義をいただくため		
本時・連携の内容			
<p>時間：5時間目</p> <p>場所：伊達市役所、防災センター</p> <p>講師：危機管理課長 足立 様、危機管理係長 深田 様、防災センター 大山 様</p> <p>内容：資料説明、質疑応答</p>			
評価(成果)	生徒は、地域の防災体制について理解を深め、探究活動の一助とすることができた。		

教科・科目	だて学(理科)	実施日	令和5年7月4日(火)
単元名	情報収集		
本時の目標	ウチダザリガニ班が発表コンテンツを作成するための情報を収集する		
連携機関等	UWクリーンレイク洞爺湖		
連携の目的	ウチダザリガニ班の発表コンテンツの作成に向けて、専門的な見地から講義をいただくため		



本時・連携の内容	
時間：5～6時間目 場所：202 教室 講師：UWクリーンレイク洞爺湖 室田 様 （洞爺湖生物多様性保全協議会会長） 内容：資料説明、質疑応答	
評価（成果）	生徒は、外来種防除活動について理解を深め、探究活動を推進することができた。

教科・科目	だて学（理科）	実施日	令和5年9月20日（水）
単 元 名	まとめ・表現		
本時の目標	成果発表会（中間発表）に向けた資料の精査		
連携機関等	山口県立大学、洞爺湖有珠山ジオパーク推進協議会		
連携の目的	発表の内容をより専門的な観点で修正するための助言をいただくため		
本時・連携の内容			
時間：9月20日（水）～10月2日（月） 場所：202 教室 講師：山口県立大学准教授 阿部 様 洞爺湖有珠山ジオパーク推進協議会事務局次長 加賀谷 様 洞爺湖有珠山ジオパーク推進協議会学術専門員 金田 様 内容：Eメールを活用した中間発表の資料に関する精査			
評 価（成果）	適切な精査をいただくことができ、生徒は誤りの修正や表現の見直しを行うことができた。		

## エ 3年次だて学「家庭科」

### (7) 連携機関

- ・社会福祉法人伊達コスモス 21  
理事長 大垣勲男 様に講演いただいた。
- ・市内福祉関連事業所  
7カ所の事業所に協力していただき、職場体験を行った。

### (4) 成果

- ・大垣様による講演では、課題設定のために必要な情報を得ることができた。また、福祉事業者の職場体験では、生徒は、現場の仕事について理解を深めることができた。

### (5) 課題

- ・当初、職場体験では生徒が班ごとに企画した取組を実践する予定であったが、連携先の事情から叶わなかった。生徒の独自性のある活動を実践する場をどのように得られるか検討する必要がある。

教科・科目	だて学（家庭）	実施日	令和5年4月18日（火）
単 元 名	課題設定		
本時の目標	伊達市の障がい者福祉のあゆみについて学ぶ		
連携機関等	社会福祉法人 伊達コスモス 21		
連携の目的	伊達市の障がい者福祉のあゆみについて、講演・説明をしていただくため		

<p>本時・連携の内容</p> <p>時間：5時間目</p> <p>場所：被服実習室</p> <p>講師：社会福祉法人伊達コスモス 21 理事長 大垣 様</p> <p>内容：伊達市の障がい者福祉のあゆみについて学ぶ</p>	
	
<p>評価（成果）</p>	<p>伊達市の障がい者福祉のあゆみについて理解し、課題決定の一助とすることができた。</p>

<p>教科・科目</p>	<p>だて学（家庭）</p>	<p>実施日</p>	<p>令和5年6月6日（火） その他2日間</p>
<p>単元名</p>	<p>職場体験</p>		
<p>本時の目標</p>	<p>伊達市の福祉事業者の仕事内容について学ぶ</p>		
<p>連携機関等</p>	<p>伊達市内保育所、幼稚園、高齢者福祉施設、障がい者福祉施設</p>		
<p>連携の目的</p>	<p>就業体験学習を通して望ましい勤労観・職業観を育むとともに、伊達の子 童福祉を学び、学習に役立てるため</p>		

<p>本時・連携の内容</p> <p>生徒を受入れに協力いただいた施設</p> <p>伊達市立ひまわり保育所、伊達市立くるみ保育所、伊達幼稚園、伊達図書館 認定こども園京王幼稚園、伊達コスモス 21、サポートセンターホームひまわり、</p>	
	

オ 1年次「総合的な探究の時間」

(7) 連携機関

・伊達市

伊達市経済環境部農務課長 片平聖太郎 様に来校いただき、伊達市における醸造用ブドウの生産推進事業について説明いただいた。

・Ryra Vineyard & Wines 株式会社

伊達市を通じて依頼し、代表取締役 桜井 楽生 様（フランス在住）に、市内で進められているワイン生産推進事業について、オンラインで講演をいただいた。

(イ) 成果

- ・伊達市及び Ryra Vineyard & Wines 株式会社で進めている“アジアのシャンパーニュ”実現に向けた計画について、理解を深めることができた。

(ウ) 課題

- ・講演をきっかけとして、ブドウ生産の実際についての学びにつなげる必要がある。

教科・科目	総合的な探究の時間	実施日	令和5年6月15日（木）
単 元 名	地域を知る		
本時の目標	伊達産ワインについて理解を深め、地域の魅力や可能性に気付く		
連携機関等	伊達市/Ryra Vineyard & Wines 株式会社		
連携の目的	伊達市のワイン生産推進事業について、専門的な見地から講演いただくため		
本時・連携の内容			
地域学習導入講演 時間：6時間目 場所：体育館 講師：Ryra Vineyard & Wines 株式会社代表取締役 桜井 様（フランス在住） 伊達市経済環境部農務課長 片平 様 内容：説明「伊達市における醸造用ブドウの生産推進事業について」 オンライン講演「“アジアのシャンパーニュ”実現に向けて」			
評 価（成果）	生徒は講演を通じて伊達市の魅力に再確認し、地域振興に係わる探究テーマについての考えを深めることができた。		

カ 2年次「総合的な探究の時間」

(7) 連携機関

- ・伊達信用金庫、市内各保育所、伊達市役所  
地域課題の單元において、電話やメールを活用して連絡をとり、探究活動を進めた。
- ・私立金甌女子高校（台湾）  
今年度より、海外見学旅行を開始したことをきっかけに、生徒は異文化理解の單元において、見学旅行で訪問・交流した当該校の生徒とオンラインで交流し、そこで得た情報を活用した探究活動を行った。
- ・社会福祉協議会  
地域課題について探究した班の一つが社会福祉協議会と連携し、12月19日（火）、高齢者を学校に招き、スマートフォンでのオンライン会議のやり方を伝えるスマホ教室を行った。その後、12月26日（火）、その高齢者と、オンライン会議を用いた交流実践活動を行った。
- ・東京学芸大学 先端教育人材育成推進機構  
地域課題について探究した班が、7月21日（金）、全国26チームがバーチャル空間に設置された会場にアバターで参加し、ポスターセッションを行うイベントである、「私たちの『探究』をつくろうプロジェクト共創イベント in Summer バーチャルポスターセッション」に参加し、その時点での探究成果と経過を交流した。

(イ) 成果

- ・外部機関とのつながりを利用して、探究を進める手法を生徒に経験させることができた。また、今回の実践をまとめて北海道教育委員会 S-TEAM 教育推進事業「社会との共創」推進プロジェクトに出場し、上位大会である「探究チャレンジ・ジャパン」へ出場することができた。

(ウ) 課題

- ・地域理解の單元においては、班ごとのテーマが大きく異なることや、時数が限られることから、オンライン会議を利用した双方向の情報収集を行うためには工夫が必要である。可能な方法を検討していきたい。
- ・異文化理解の單元においては、今年度は初めての海外見学旅行となったこともあり、見学旅行の予定の詳細が決まるのが「異文化理解」の単元の活動が始まった後になったため、活動の内容に連携を含めることが困難であった。

教科・科目	総合的な探究の時間	実施日	令和5年6月6日(火)～
単 元 名	地域課題		
本時の目標	情報収集		
連携機関等	伊達信用金庫		
連携の目的	伊達信用金庫の役割について、専門的な見地から講義をいただくため		
本時・連携の内容			
時間：6月6日(火)～6月26日(木)			
場所：各教室			
講師：伊達信用金庫 渡辺 様			
内容：Eメールを活用した生徒の質問に対する回答			
評価(成果)	必要な情報を収集し、探究活動を推進することができた。		

教科・科目	総合的な探究の時間	実施日	令和5年12月19日(火)～
単 元 名	異文化理解		
本時の目標	情報収集		
連携機関等	私立金甌女子高校 生徒		
連携の目的	台湾の食文化について、連携先の生徒から必要な情報を収集するため		
本時・連携の内容			
時間：12月19日(火)～1月19日(金)			
場所：各教室			
講師：私立金甌女子高校 生徒			
内容：Eメールを活用した生徒の質問に対する回答			
評価(成果)	必要な情報を収集し、探究活動を推進することができた。		

キ 3年次国語科「古典探究」(学校設定科目)

(7) 連携機関

- ・札幌国際大学人文学部

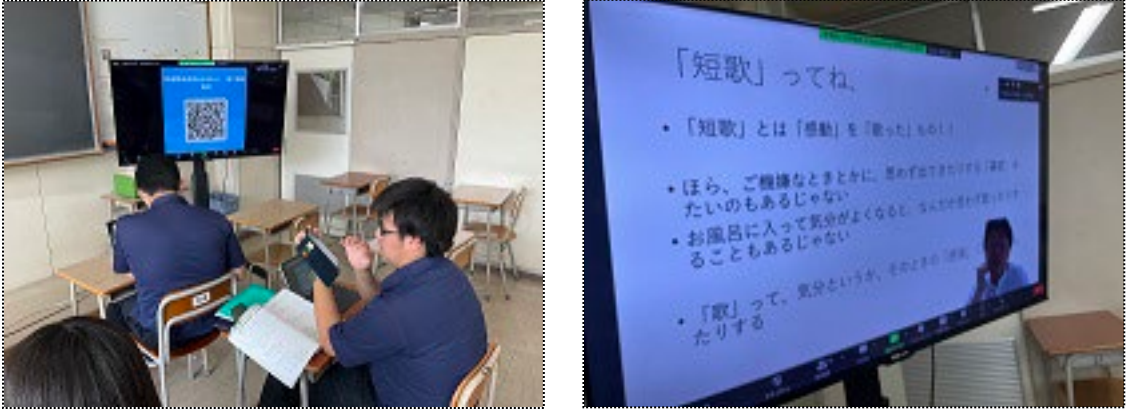
札幌国際大学准教授 大村勅夫 様に4回に渡ってオンラインの授業・意見交流・講義などを行った後、9月4日(月)に来校いただき、授業を実施していただいた。

(イ) 成果

- ・オンラインを活用した双方向的な授業を計画的に実施し、対面での授業につなげることで、生徒は授業内容を深化及び定着させることができた。

(ウ) 課題

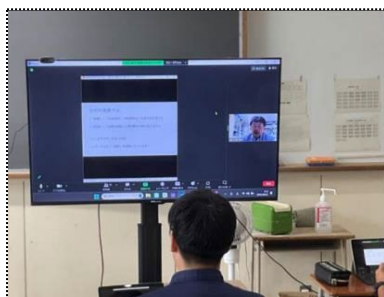
- ・接続トラブルが発生した際の対処方法について、事前に確認が必要である。

教科・科目	古典探究（学校設定科目）	実施日	令和5年7月24日（月）
単元名	和歌を詠む ・古典に関する幅広い知識を身に付け、豊かな情操を培うとともに、我が国の言語文化を尊重する態度を養う。		
本時の目標	学習の見通しを持つとともに、和歌の基本的な事項を復習する。		
連携機関等	学校法人札幌国際大学 札幌国際大学人文学部		
連携の目的	韻文の学習に係る、専門的な見地からの助言をいただくため		
本時・連携の内容			
時間：1時間目 場所：202教室 講師：札幌国際大学人文学部 大村 様 内容：資料説明及び質疑応答			
			
評価（成果）	本授業は、夏季休業明けから取り組む授業の事前学習としての位置付けだった。生徒は、和歌の基本的な事項を復習し、今後の学習の見通しをもつことができた。		

教科・科目	古典探究（学校設定科目）	実施日	令和5年8月21日（月）
単元名	和歌を詠む ・古典に関する幅広い知識を身に付け、豊かな情操を培うとともに、我が国の言語文化を尊重する態度を養う。		
本時の目標	代表的な和歌について知るとともに、対話を通して解釈の視野を広げる。		
連携機関等	学校法人札幌国際大学 札幌国際大学人文学部		
連携の目的	韻文の学習に係る専門的な見地からの助言をいただくため		
本時・連携の内容			



時間：1時間目  
 場所：202 教室  
 講師：札幌国際大学人文学部 大村 様  
 内容：対話による意見交流及び講義

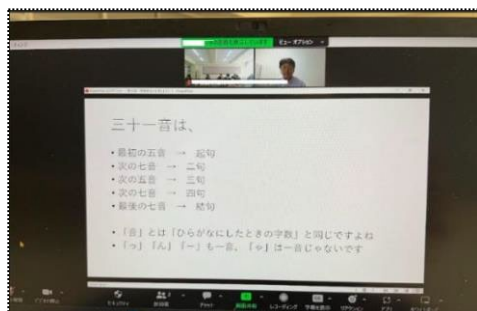


評価 (成果・課題)	ICT 機器の接続トラブルにより十分な時間を確保できないパートもあったが、活発な対話より、和歌の解釈について視野を広げることができた。
---------------	---



教科・科目	古典探究（学校設定科目）	実施日	令和5年8月28日（月）
単元名	和歌を詠む ・古典に関する幅広い知識を身に付け、豊かな情操を培うとともに、我が国の言語文化を尊重する態度を養う。		
本時の目標	現代短歌を鑑賞し、我が国の伝統的な言語文化やその変遷について考える。		
連携機関等	学校法人札幌国際大学 札幌国際大学人文学部		
連携の目的	韻文の学習に係る、専門的な見地からの助言をいただくため		
本時・連携の内容			
時間：1時間目 場所：202 教室 講師：札幌国際大学人文学部 大村 様 内容：対話等による意見交流及び講義			
評価（成果）	オンラインによる音声的なやり取りだけでなく、Google forms 等も用いた視覚的なやり取りも含む同時双方向的な授業を展開することができた。		

教科・科目	古典探究（学校設定科目）	実施日	令和5年8月31日（水）
単元名	和歌を詠む ・古典に関する幅広い知識を身に付け、豊かな情操を培うとともに、我が国の言語文化を尊重する態度を養う。		
本時の目標	短歌がどのように作られるのかを知り、その過程を体験する。		
連携機関等	学校法人札幌国際大学 札幌国際大学人文学部		
連携の目的	韻文の学習に係る、専門的な見地からの助言をいただくため		
本時・連携の内容			

時間：3時間目  
 場所：202 教室  
 講師：札幌国際大学人文学部 大村 様  
 内容：対話による意見交流及び講義



評価（成果） 専門家の助言を受けながら、個人思考を深めることができた。

教科・科目	古典探究（学校設定科目）	実施日	令和5年9月4日（月）
単元名	和歌を詠む ・古典に関する幅広い知識を身に付け、豊かな情操を培うとともに、我が国の言語文化を尊重する態度を養う。		
本時の目標	作歌をとおして、短歌や和歌にどのような思いが込められているかを読み取る力を高める。		
連携機関等	学校法人札幌国際大学 札幌国際大学人文学部		
連携の目的	韻文の学習に係る、専門的な見地からの助言をいただくため		
本時・連携の内容			
時間：1時間目 場所：202 教室 講師：札幌国際大学人文学部 大村 様 内容：対話による意見交流及び講義			
			
評価（成果）	オンラインによる講義を経ての対面授業によって、生徒たちはスムーズに言語活動に没入することができた。		

### ク 3年次国語科「作品講読」

#### (7) 連携機関

・札幌大学


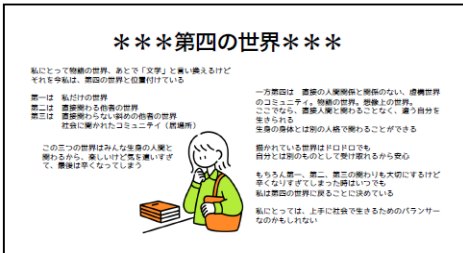
札幌大学教授 荒木奈美 様にオンラインにて、「文学」を学ぶ価値についての講義



を行っていただいた。

(4) 成果

- ・専門的な見地から助言をいただきながら、生徒は1年間の学習を振り返ることができた。

教科・科目	作品講読（学校設定科目）	実施日	令和6年1月23日（火）
単元名	文学を研究する意味とは何かを考える		
本時の目標	1年間の学習を振り返り、「文学」を学ぶ価値について考えを深める		
連携機関等	札幌大学		
連携の目的	文学について、専門的な見地からの助言をいただくため		
本時・連携の内容			
時間：3時間目 場所：3B教室 講師：札幌大学 荒木 様 内容：「文学」を学ぶ価値についての講義			
1 文学との出会い 2 第四の世界 3 「文学」と文学 4 文豪が現代にいたら 5 「表現」を通じた人間性の発露 6 「文学」は私たちに寄り添う 7 「文学」に関する協議			
評価（成果）	文学を専門にする教授から、その価値や研究の姿勢について講義をいただき、これまでの学習をより深めることができた。また、生徒の身の回りにある「文学」について指摘をいただき、感性を豊かにすることができた。		

ケ 3年次理科「地学」

(7) 連携機関

- ・北海道立博物館  
 学芸員 成田敦史 様に「北海道の化石」という題でオンライン授業を行っていただいた。オンラインで事前の打合わせを行い、生徒から本校が所有する化石標本についてお伝えし、これを活用しながら双方向的な授業を実施することができた。



(4) 成果

- ・専門家の知見を生かし、双方向的なオンライン授業を実施することができた。特に、本校には地学を専門とする教員がいないことから、生徒の学びを深めるために効果的であった。

(5) 課題

- ・授業の構成が双方向的でも、教室で生徒の声をどのように拾うのがよいか、集中できていない生徒に対する教室内の指導をどのように行ったら効果的かをシミュレーションしたり、事前に講師と打合わせをしたりする必要がある。また、双方向的な授業のデザインは講師が持っているノウハウであり、今回の計画によって作られたわけで

はないため、他科目で実施するためには、連携機関先との事前の打合せが必要である。

教科・科目	理科・地学	実施日	令和5年9月15日(金) 9月22日(金)
単元名	古生物		
本時の目標	化石の特徴と、北海道の化石について理解する。		
連携機関等	北海道博物館		
連携の目的	化石について、専門的な見地からオンライン授業をしていただくため		
本時・連携の内容			
時間：5時間目 場所：物理室 講師：北海道博物館学芸員 成田 様 内容：化石とは何か。北海道の化石について、化石から分かること。			
			
評価 (成果・課題)	専門的な見地を盛り込んだ授業を受けることができた。 オンラインの音声環境の整備や、授業中の生徒への効果的な指導方法の改善が必要である。		

### コ 3年次情報科「情報デザイン」

#### (7) 連携機関

- ・吉田学園情報デザイン専門学校

連携協定を結んでいる吉田学園とオンラインで複数回の打ち合わせを行い、エンジニア系学科 佐々木博幸 様、坂本耕一 様による授業を実施した。

#### (1) 成果

- ・ウェブデザインの導入の授業を専門的な指導を受けながら実施できた。

教科・科目	情報デザイン	実施日	令和5年11月22日(水)
単元名	Web デザイン		
本時の目標	購入者マーケットを想定し、受け入れられるような Web ページをデザインする		
連携機関等	吉田学園情報デザイン専門学校エンジニア系学科		
連携の目的	実際に専門学校で行われている授業を体験することにより、より専門性のある授業を実施していただくため		
本時・連携の内容			
時間：5時間目 場所：パソコン教室 講師：吉田学園情報デザイン専門学校エンジニア系学科 佐々木 様、坂本 様			

内容：Web デザインの導入	
評価（成果）	Wed デザインを、コンピュータでなく、紙面を使ってデザインする手法を学ぶことができた。

## 6 研究2年目の成果と課題

本校では、本事業の取組全体による成果を、次の3視点から目標指標を設定し、評価を行うこととしている。

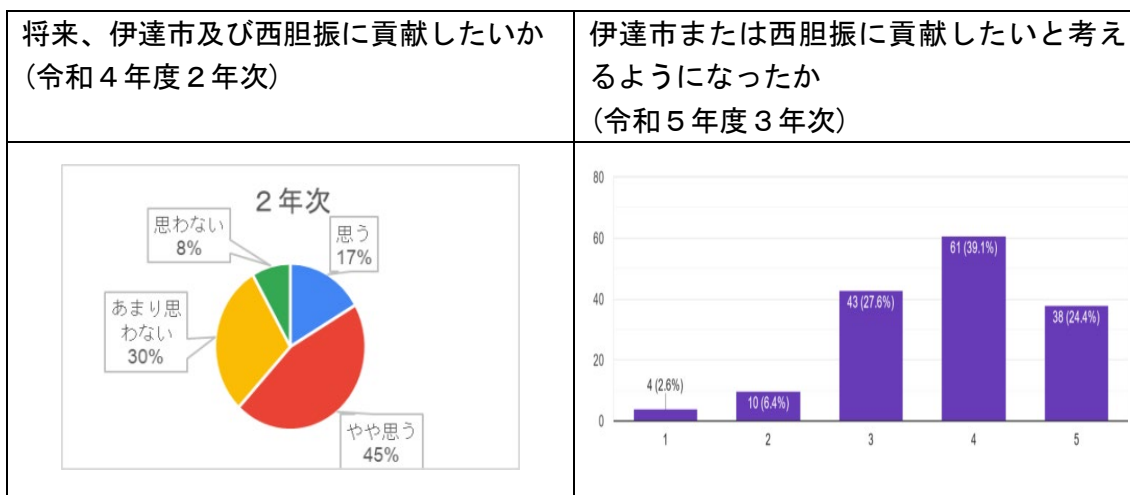
- 遠隔講義等を受ける機会を確保した結果、伊達市及び西胆振の未来を創造する生徒を育成することができたか。  
（指標1）将来、伊達市及び西胆振に貢献したいと考える生徒の割合
- 生徒に育成を目指す資質・能力（特に7つのジェネリックスキルのうち、「思考力」「創造力」「分析力」）が身に付いたか。  
（指標2）ジェネリックスキルに関するルーブリック評価でB以上の生徒の割合
- 地域と連携・協働した取組を推進し、本事業の取組を地域に開いた結果、本校の教育活動に魅力を感じ、進学したいと考える地元中学生を増やすことができたか。  
（指標3）伊達開来高校に進学したいと考える伊達市内の中学生の割合

### (1) 指標1について

- ・本事業の中心である「だて学」の授業を履修した令和3年度入学生について、昨年度のアンケートと今年度のアンケート結果を比較したところ、伊達市及び西胆振に貢献したいと思う・やや思う生徒の割合に増加がみられた。ただし、校内体制の変革に伴って、アンケートを担当した部署が異なることから、以下のようにアンケートの質問・形式が異なるので注意が必要である。

（令和4年度2年次）「将来、伊達市及び西胆振に貢献したいか」に対し、  
「思う やや思う あまり思わない 思わない」の4段階の回答  
（令和5年度3年次）「伊達市または西胆振に貢献したいと考えるようになりましたか」に対し、「5 4 3 2 1」の5段階の回答

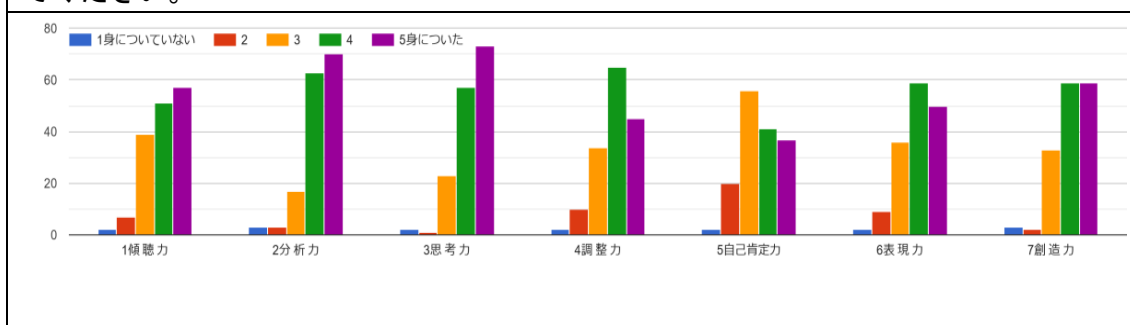
令和4年度の2年次生徒は、「思う」が17%、「やや思う」が45%であったが、令和5年度の3年次生徒は、「5」が24.4%、「4」が39.1%であり、伊達市及び西胆振に貢献したいと強く思う生徒が7.4ポイント、それぞれの合計でも1.5ポイント増加したとすることができる。



(2) 指標2について

- 「だて学」の授業を履修した令和3年度入学生について、本校の7つのジェネリックスキルについて身に付いた度合いを5段階で自己評価させたところ、思考力、分析力、創造力の順に「5身に付いた」との回答が多かったことから、本事業で特に「思考力」「創造力」「分析力」を身に付けることができたと言える。

探究活動を通じて身に付いたと思うジェネリックスキルについて5段階で自己評価してください。



- なお、だて学の評価は、探究のサイクルにおける段階ごとに学力の3要素それぞれを評価するルーブリックを開発して行ったため、当初計画していたジェネリックスキルについてのルーブリック評価は行わなかった。

(3) 指標3について

- 伊達市及び西胆振（伊達市、壮瞥町、洞爺湖町、豊浦町）からの本校への入学者数は次のとおりである。（左上：本校入学者数、右上：中学校卒業生数、下：割合）

	伊達中		光陵中		大滝		伊達市		西胆振	
R3	80	173	35	79	2	7	117	259	153	353
	46.2%		44.3%		28.6%		45.2%		43.3%	
R4	77	186	38	85	3	4	118	275	164	386
	41.4%		44.7%		75.0%		42.9%		42.5%	
R5	98	179	48	93	4	7	150	279	186	367
	54.7%		51.6%		57.1%		53.8%		50.7%	

- 本校は、1学年6クラスの予定で開校したが、令和3、4年度の入学者数は200名以下（R3, 196、R4, 188）であったため、結果的に5クラスとなった。令和5年度については、

入学者が208名であったことから、1年次生は6クラスである。これは、伊達市内からの入学希望者が令和4年度より9.4ポイント増加したことが大きな要因となっている。伊達市内の入学希望者が増加した理由の一つとして、本事業の取組が地元紙やNHKで複数回報道され、中学生に本校の取組を周知できたことが考えられる。

## 7 事業の実施体制や管理方法

### (1) 管理機関による事業の実施体制や管理方法

#### ア 実施体制

- ・北海道教育委員会では、伊達開来高校が本事業を円滑に進めることができるよう、高校教育課長の下に、創造的教育方法実践プログラム推進チームを組織し、運営指導委員会やコンソーシアム会議に本校を所管する胆振教育局の指導主事を派遣するなどして、指導・助言を行った。

#### イ 管理方法

- ・創造的教育方法実践プログラム推進チームを運営指導委員会やコンソーシアム会議に派遣し進捗状況を把握するとともに、胆振教育局高等学校教育指導班が日常的に本校からの連絡・相談に対応し、その状況を推進チームに逐次報告した。運営指導委員会やコンソーシアム会議を開催し、進捗状況を管理するとともに事業実施上の課題を整理し、本校に指導・助言することで本事業を推進した。なお、運営指導委員に対しては謝金を支出している。

### (2) 高等学校における事業の実施体制や管理方法について

#### ア 実施体制

- ・本校では、職員間の連携と業務の平準化を推進するため、令和4年度から校務分掌を3部8課に再編し、各部・課には、部長・課長を置き、分掌間の連絡調整は部長が担う体制とした。
- ・本事業は、「特色ある教育推進課」、「教務課」、「図書情報課」を中心とした「カリキュラムPT」が中心的な役割を担うこととなっていたが、年度替わりの異動による人員の変化により、今年度は「特色ある教育推進課」が主導となり事業を進めた。
- ・また、今年度開講の「だて学」については、初めての試みだったこともあり、「だて学担当者会議」を組織し、定期的を実施した。

#### イ 管理方法

- ・成果発表会まで毎月実施した「だて学担当者会議」において、進捗状況や評価の観点について情報共有を行い、指導の充実を図った。
- ・年3回、コンソーシアム会議を開催し、各構成員の専門性から本校の取組に助言いただくことで、カリキュラム開発を推進した。
- ・年2回、運営指導委員会を開催し、学校評価及び生徒による成果発表会等の各種イベントの評価をいただくなどして、カリキュラムの改善や開発を推進した。

## 8 運営指導委員会の体制及び取組

### (1) 体制

所属	氏名	主な実績
伊達市教育委員会教育長	影山 吉則	元伊達高校校長、伊達緑丘高校教頭、伊達市内の小中高の連携をリード。

北海道大学 観光学高等研究センター 教授	山村 高淑	センター長、道教委主催の様々な事業にセンターとして協力。
学校法人吉田学園 学園長	大山 節夫	元北海道立教育研究所副所長、登別明日中等教育学校初代校長、同校の「地域との協働」や「グローバル教育」などの礎を築く。
九州大学教育学部 准教授	伊藤 崇達	遠隔授業に関する研究開発学校運営指導委員（H29～R3）
東京学芸大学 特命教授	長尾 篤志	元文部科学省主任視学官、SSHをはじめ、様々な事業を指導した経験があり、STEAM教育にも造詣が深い。
北海道教育大学教職大学院	赤間 幸人	元北海道教育庁学校教育監、「総合的な学習の時間」を中心に協同学習を推進する。共著に「アクティブ・ラーナーを育てる高校」がある。

※委員について、昨年度から継続して依頼

## (2) 取組

- ・第1回会議 令和5年11月7日（火）13:30～16:30

### (ア) 「だて学」発表会見学

#### (イ) 指導助言

- ・伊達市への提案であったり、自分たちにできることであったりと、様々な発表があった。多様な声を聴くことができ、有意義であった。この取組をここで終わりにせず、さらに良いものとなるよう励んでほしい。
- ・「課題の設定」、「情報の収集」、「整理・分析」、「まとめ・表現」と探究のプロセスに沿った活動となっている。よりよい成果となるよう、ここでの提案を実行したり、実用化したりできればと感じた。
- ・先輩たちの課題や先行事例のある他の地域の課題を引き継ぐような、継続性や連続性のある取組になっていくことも意義深いと考える。そうすれば、各教科の学びが「探究」につながっているという実感が強まるのではないか。また、仮説とは異なる実際の現場の声を聴き、ギャップに苦しんだとの話があったが、そうした現実の課題に直面し、葛藤が生まれることも探究の魅力だ。そこから何か生かすものが得られれば素晴らしい成果になると信じている。他方で、発表を聴く側の指導の重要性も感じる。質問の出なかった発表もあったが、聴く側には「質問しようと思って聴く」という姿勢をもたせたい。
- ・総じて素晴らしい発表だった。3年次生はこれで終わりかもしれないが、これを下の年次生が引き継ぐことができれば、よりよいものになるのではないか。全体としては、仮説や提案に留まる発表が多かったが、これをぜひ実現につなげてほしい。将来を意識して、各分科に分かれて探究に取り組む体制は、伊達開来高校にとって大きな強みであり、今後も続けてほしい。

- ・第2回会議 令和6年3月15日（金）13:00～15:00

### (ア) 今年度の取組についての報告

#### (イ) 次年度に向けて（計画の報告）

#### (ウ) 指導助言

- ・伊達市という限定的な環境においても、現代ではインターネットを活用することで、情報収集や専門的な指導助言を受けることは可能であるため、そういった視点をもって先生方には指導にあたっていただきたい。生徒の探究活動の形として、時間的経緯という視点をもって活動をすることも大切のように感じる。
- ・教育心理の観点から、OECD はラーニングコンパス 2030 の教育方法の実践例を紹介し、その中で、トランスフォーマルコンピテンシーの重要性について示している。変容する社会に対応する力を、だて学にて育てていただきたいのだが、その際には教科と総合的な探究の時間を繋いでいくことが大切。そのように考えると、複数教科の有機的結び付きにみられる効果とは何かを考えなければならない。この具体化がだて学では可能であるように感じる。ジェネリックスキルに限らず、様々な視点からこの具体性について考えてみるとよい。
- ・生徒が主体的に学ぶことができる枠組みを考えることが大切である。オンラインや教室での協働的な学びなど、形式は様々であるが、工夫をしていくことが大切である。生徒が何をできるようになるかが大切だが、「自己肯定力」の低さが気になる。これは生徒の学習力に大きく関わるため、この能力の育成についても関心をもって取り組んでいただきたい。発言を担保する学習環境づくりを意識するとよい。
- ・教科横断的な取組はなかなか難しいが、どこかでそういった取組が確認できるとよい。文理の組み合わせが望ましい。
- ・データサイエンス教育は、理工系という印象があり、全ての教科において重要であることが理解されていない。生徒の学びをきっかけに教員が学びを広げていくことも大切。教育者も新たな知識の獲得が必要であるため、その観点をもって運営していることを忘れないでほしい。
- ・全体に係る指導を終えてから、専門性のある指導へと段階的に移行する形式が散見される。専門性のある指導を行う際には地域の方を講師に招いて、その地域に関わる専門的な内容を扱っているが、そういった関わりの中でよくあることとして、高校生の学びの深まりに対して表現力が不足しているため、他者に対して内容や考えなどを正確に伝えられないことが挙げられる。ジェネリックスキルの上位的に位置付けられるのが「表現力」である（土台の上に成り立つ）ため、自らの学習過程を雄弁に語る力が身に付けていくことが大切。この過程を通して、自己肯定力が身に付いていくと考えている。
- ・これまで築き上げた体制を崩さないように、主担当を明確に決定すべきである。先生方の指導法をバージョンアップさせていくことが大切。若手の先生にもスポットが当たるとよいのではないか。
- ・地域との接続という観点から、指定事業を終えたのちの取組を続けるためには、大学の公開授業を活用する方法があることを伝えておきたい。首都圏の大学ではオンラインで学ぶことができる科目等履修生という取組があるため、予算なしで実施することができるのではないだろうか。

## 9 コンソーシアムの体制及び取組

### (1) 体制

所属	氏名	主な実績
伊達市企画財政部長	岡村 崇央	高校が市や企業と連携した取組を支援



伊達市教育委員会教育部 学校教育課長	今藤 康之	高校が中学校と連携する際の窓口
山口県立大学 国際文化学部 国際文化学科 准教授	阿部 真育	北海道・札幌市・北海道大学・ニトリの協定における北大の担当者
北海道大学アイヌ共生推進本部 准教授	岡田 真弓	道教委主催の「S-TEAM 教育推進事業」における講師
北海道教育大学函館校 教授 キャンパス長補佐 地域協働推進センター長	齋藤 征人	高校生の探究活動と学内の教員を結び付けるなど、高校が地域と協働する取組を支援
学校法人吉田学園 専門学校 北海道福祉・保育大学校長	吉田 克彦	本校との協連携定締結の担当者
ベネッセコーポレーション 北海道支社課長	渡辺 健太	本校生徒の成績を多角的に分析、他県の取組等の情報を提供

※委員は前年度から継続して依頼

## (2) 取組

- ・ 第1回会議 令和5年9月5日(火) 14:00~16:00
  - (ア) 今年度の取組についての説明
  - (イ) 授業見学
  - (ウ) 研究協議
    - ・ 実際の授業を見学できて良かった。創造的教育方法実践プログラムの趣旨である、「教科等横断的な学び」の実現のために、だて学の発表会からさらに探究活動が展開できれば良いのではないか。例えば、発表会終了後、専門性を高めた分野の生徒同士が、協働する場を設定するとよいのではないか。
    - ・ 探究はワクワク感から出発してほしい。そもそもうまくいかなかったことについては、仮説が間違っているのではないかと考えることも大事ではないか。成果を意味付けるためにも、教員がどのように伴走するかが大事になってくる。
- ・ 第2回会議 令和5年11月7日(火) 13:30~16:30 (運営指導委員会と合同開催)
- ・ 第3回会議 令和6年3月15日(金) 13:00~15:00 (運営指導委員会と合同開催)

## 10 コーディネーターの配置及び活動内容

- (1) コーディネーター
  - ・ 伊藤 秀範 (71歳)
  - ・ 北海道大学大学院工学研究科博士課程修了 (工学博士)
  - ・ 国立大学法人室蘭工業大学名誉教授
  - ・ 国立大学法人北海道国立大学機構監事
  - ・ 業務内容として、関係機関との連絡調整のほか、各教科と連携して実践的な探究活動のアドバイスをを行う。また、胆振地区における進路相談員としての経験から、地域探究活動における新たな活動場所を開拓する。
- (2) 今年度活動内容
  - ・ 「だて学」における生徒へのアドバイス及び教員への指導助言
  - ・ 高等教育機関との連携、連絡調整

## 11 令和5年度成果普及のための取組

- (1) 令和5年度「探究チャレンジ胆振・日高」 (令和6年1月10日(水))

- ・ 2年次1チームが「アロニアちゃんバズらせ大作戦」で参加
- (2) 令和5年度「社会との共創」推進プロジェクト（令和6年1月9日(火)）
  - ・ 2年次1チームが「伊達レンジャー ～みんなで助け合うまちづくり～」で参加
  - ・ 上位大会「探究チャレンジ・ジャパン」（令和6年2月1日(木)北海道大学）参加

## 12 次年度に向けて

いよいよ最終年度となるにあたり、次に掲げる事柄の実践を目指す。

- 教科等横断的な学習のカリキュラムの改善と普及
  - ・ 本事業で開発したカリキュラムを中心に、教育課程全体の改善を図る。
  - ・ 各種研究協議会等において、本校の実践を報告するとともに、報告書を作成してウェブページに掲載する。
- 他県の指定校との交流
  - ・ 本校が主体となり、探究的な学習活動を取り入れている他県の指定校の生徒が実践発表を行う交流会（仮称「探究サミット」）を実施する。
- 事業終了後の自走を見据えた取組
  - ・ 本校と地域との連携、課題探究への活用については、本校カリキュラムPTを中心に実践を進めてきたが、今後は教務部がその役割を引き継ぎ、事業終了後も継続できる見通しである。
  - ・ コンソーシアムに関しては、今年度の運用成果を通して、令和6年度中にコンソーシアム体制の在り方についての引継ぎ等を行うとともに、令和7年度中に学校運営協議会（コミュニティスクール）がその職を担うこととする。
- 学校運営協議会の充実
  - ・ 令和5年度より学校運営協議会（コミュニティスクール）を立ち上げた。協議会委員は、自治会長、PTA役員（会長含む）、市役所職員、市議会議員、市民活動支援担当、本校職員となっている。今後は、この組織に現在のコンソーシアム構成員にも加わってもらうことで、市内各所との連携と、遠隔での繋がりとの融合を目指したい。

今年度初めての実践であった「だて学」の探究活動は、「アウトサイド・イン（未来ソウゾウ“想像・創造”型探究活動）」を目指して、高等教育機関や企業等の協力を得ながら、地域貢献につながる提案等ができるよう取り組んできた。初めての試みながら、昨年度までの探究活動をベースに、生徒たちは豊かな発想を広げて、多岐にわたる課題解決策を提案していた。提案の完成度も高く、関係機関からも高評価をいただいている。

しかしながら、実践レベルまでは至っておらず、改善の余地がある。そこで、次年度は、さらに本校の探究活動を深め、教師の考えや発想等を超えていく生徒の増加を目指す予定である。教師が生徒の考え等の隙間を埋める作業をサポートするとともに、専門家の力を借りながら生徒の考え等を膨らませる。その上で、机上の空論を振りかざすのではなく、失敗も大いに経験しながら実践を重ねる探究活動へと進化させたい。

そして、その実践の先に、地域とともに地道に歩みを進め、他者への貢献による喜びを知り、自己実現しながら未来をソウゾウ（創造・想像）していく生徒の育成を目指すことが、本校の目標である。